

「南高梅」誕生の地 (みなべ町)

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

熊野古道

みなべ町

47

みなべ町は和歌山の「南高梅」が誕生した代表的な地域ブランド地だ。この地域の梅つ

くりは、2015年12月に「みなべ・田辺の梅システム」として世界農業遺産に認定されて自然環境的価値が加わったことを知り、同町の千里梅林を訪ねた。



千里梅林(みなべ町)

高速道路のみなべイオンターを降り、まず南部湾を一望するため猪野山公園へ。沖に三つの鍋の形をした鹿島が浮かんでいた。猪野山を下り、梅林とウミガメで有名な千里海岸を目指す途中に、JR南部駅近くに南高梅の名前の由来となった県立南部高校がある。

明治時代に上南部村(現みなべ町)で高田貞楠が近所の人から購入した60本の梅の中に、豊産で実が大きく美しい紅のかかる梅(高田梅)を見つけ、育てた。その「高田梅」が昭和20年代、地域で栽培されている梅の中で最も梅干しに適していることとされた。この選定に大きく貢献した南部高の愛称「南高」に因んで南高梅と名付けられたのだ。

海岸線から熊野街道に入り、高台に登った。眼下に千里海岸が見え、足元から広がる斜面の梅林は潮風を吸って赤い新芽を出している。昨年(2016年)2月に訪ねた時の梅林は真っ白な花を付けて海岸線まで伸びており、その合間を紀勢本線の列車が走っていた。眺望は、みなべ町の自然の豊かさ(現みなべ町)を高田貞楠が近所の人から購入した60本の梅の中に、豊産で実が大きく美しい紅のかかる梅(高田梅)を見つけ、育てた。その「高田梅」が昭和20年代、地域で栽培されている梅の中で最も梅干しに適していることとされた。この選定に大きく貢献した南部高の愛称「南高」に因んで南高梅と名付けられたのだ。

千里王子を横切った小道に入ると間もなく、ぱっと視界が明るくなり、右手には紀勢本線、左手には梅林が広がり、梅の根が急斜面の裾をしっかりと固めていた。近くの農家の刈り取った草は肥料として利用する。新炭林に生息するミツバチが梅の受粉を助け、梅の花はミツバチの蜜源となる。共生関係ができている。2014年の施行の「紀州南高梅使用のおにぎり」と梅干しの普及に関する条例のことである。

みなべ町うめ課に梅システムの内容を尋ねた。これまで工学的技術を駆使して生産性を上げてきた産業は資源枯渇

未来先取り「梅システム」

列車を待つカメラマンが数多く訪れていた。この豊かさの源は何なのか。梅システムとの関係が知りたくなかった。

千里王子を横切った小道に入ると間もなく、ぱっと視界が明るくなり、右手には紀勢本線、左手には梅林が広がり、梅の根が急斜面の裾をしっかりと固めていた。近くの農家の刈り取った草は肥料として利用する。新炭林(ウバメガシなどの雑木)を残して水源涵養や養分補給、斜面の崩落防止等の機能を持たせ、梅の生産を支える。梅林は草を生かすことで感服した。

賢い人間の智慧に出合った気がした。世界農業遺産に認定されただけの価値があり、未来を先取りしていることに感服した。

初日受け赤き芽揃う

梅林 泰華